頼山陽「西遊詩巻」訳注（三）

谷口匡

今回訳注を加えるのは、前号の続きから、底本の順序で最後になる34の詩までの、以下の十七首である。詩題を欠くものは括弧内に初句を示す。これで「西遊詩巻」所収の詩を一通りすべて紹介したことになる。

24 長碕寓楼作倣韋蘇州録以米法　25 戯題自画山水似校書袖笑袖笑嘗侍清客江芸閣者
26 又代袖咲憶芸閣　27（眠驚船底響寒潮）　28（温山遥面阿蘇山）
29（危礁乱立大濤間）　30（一澗平分南北州）　31（路遇朝鮮俘獲孫）
32 麑州旅舎歌
33 題画像七首　A 武侯　B 壮繆　C 青蓮　D 武忠　E 和靖　F 文忠　G 武穆
34 七星春歌

訳注

24 長碕寓樓作倣韋蘇州錄以米法

長碕の寓楼の作。韋蘇州に倣い、録するに米法を以ってす

水窗夕多風
又納月色朗
客贈魚與酒
風月共抵掌
一醉忽菅騰
不知客已往
斜影猶在窗
臥聽柔櫓響

水窓　夕に風多く、
又た月色の朗らかなるを納る。
客は贈る魚と酒と、
風月共に　掌　に抵る。
一醉忽ち菅騰、
知らず客已に往きしを。
斜影猶お窓に在り、
臥して聴く柔櫓の響き。

長崎の寓居にての作。韋応物の詩のスタイルを真似して作り、米芾の筆法で書いた。

水辺の窓は夕方になると風が盛んに吹き込み、明るい月光を室内に引き入れている。／客が魚と酒を差し入れてくれたので、それで清らかな風と明月の両方を手に入れて楽しむ。／一旦酔うとあっと言う間に気持ちがよくなり、気が

つけば客はすでに帰っている。／ふと見ると窓からは相変わらず月光が斜めに差し込み、私は横になって静かに響く船のかいの音に耳を傾けている。

『詩鈔』巻三、『詩集』巻十一に「僦居五首」と題し、その第五首として収める詩の初案。長崎で、もと武元登々庵（本姓、明石。名、正質・質。字、景文。号、登々庵）の寓居であった富観楼に滞在した時の作。『全伝』文政元年六月五日に「築地・長門屋信蔵宅の寓居（富観楼）に移る。家は、海口に臨み、登々庵の久しく留寓した跡で、楼の額字は、その遺筆であった」と見え、また『詩鈔』『詩集』の題下に「即武（元）景文旧寓」の自注がある。武元登々庵と山陽の交友及びその詩については『頼山陽とその時代（中）』三八～四七頁に詳しい。『詩集』には詩の末尾に「倣韋蘇州」の注記がある。〔納月色朗〕六朝宋の鮑照の「君子有所思に代う」の詩に「琁題　行月を納る」とある。〔客贈魚与酒〕宋の蘇軾の「後の赤壁の賦」に「是に於いて酒と魚とを携え、復た赤壁の下に遊ぶ」とあるのに拠る。『詩鈔』『詩集』は「客携酒与魚」に改める。〔抵掌〕ここは「掌を抵つ」と読めば感激して拍手する意。〔嘗騰〕意識がはっきりせず、ぼんやりしているさま。〔斜影〕斜めに差し込んでくる月光。〔韋蘇州〕唐の詩人韋応物。〔米法〕北宋の書家米芾の筆法。

25　戯題自畫山水似校書袖　　戯れに自画山水に題して校書袖笑に似ぐ。
笑袖笑嘗侍清客江芸閣　　袖笑は嘗て清客江芸閣に侍する者なり
者

醉墨映佗眉黛青　　醉墨　佗が眉黛を映じて青く、
綺筵伸紙倩娉婷　　綺筵　紙を伸ぶるに娉婷を倩う。

知卿曾捧江郎研　知る卿曾て江郎の研を捧げしを、
得似渠儂泥裏釘　渠儂が泥裏釘に似るを得たり。

自分で画いた山水画にたわむれに題し、妓女の袖笑に与える。袖笑は以前、清国の文人・江芸閣のそばに仕えていた人である。

美しい敷物の上に紙を敷く仕事を美人にやってもらったので、酒に酔ってかいた画に彼女の眉墨の色が青く反射している。／あなたは、かつて江芸閣のそばですずりを持って仕えていたがゆえに、私の画が彼の「泥裏抜釘」の画法に似ているのがおわかりでしょうね。

『詩鈔』巻三、『詩集』巻十一に「席上墨戯題」と題して収める詩の初案。〔袖笑〕長崎の花街・丸山の妓女。江芸閣の狎妓であった。〔江芸閣〕文化十一年夏の交易船で長崎に来航した清人。字を大楣、印亭・十二瑤台使者と号し、詩・書・画をよくした。〔酔墨〕酔っている時にかいた画。〔映〕『詩鈔』『詩集』は「輸」に改める。〔佗〕袖笑を指す。『詩鈔』『詩集』は「他」に改める。〔眉黛〕眉墨で書いた女性の眉。『詩鈔』『詩集』は「烟黛」に改める。〔綺筵〕美しい敷物。『詩鈔』『詩集』は「和毫」に改める。〔倩〕頼んで代わりにやってもらう。〔娉婷〕美人。〔渠儂〕三人称を表す。〔泥裏釘〕宋の画家江参が用いた絵画の技法「泥裏抜釘」のこと。点苔を描くのに錐のような長点を打ったのが、泥の中から抜き出た釘のように見えたからそう呼ばれた。

26　又代袖咲憶芸閣　又た袖咲に代わって芸閣を憶う
眼穿鱗羽信沈沈　眼は鱗羽を穿って信に沈沈たり、

翠袖倚寒江閣深　翠袖　寒に倚って江閣深し。
三十六灣秋水緑　三十六灣　秋水緑なるも、
不如一寸憶君心　如かず一寸の君を憶う心に。

また袖笑の代わりに江芸閣のことを想う

私はあなたのお手紙を穴があくほど読んで、逢えない気持ちが晴れず、奥深い江のほとりの高楼の寂しい窓に寄りかかっています。／三十六湾の秋の水は一様に緑色だが、この秋の水も、私があなたを恋い慕う一寸の真心には、深さにおいて及ばないでしょう。

『詩集』巻十一に「戯代校書袖笑憶江辛夷〔芸閣〕乃叙吾憶也二首」と題し、その第一首として収める。当時、長崎の遊郭には清国からの客が多かったので、知識人が遊女のために恋文を代作してやることがあった（『頼山陽とその時代（中）』四五～四六頁参照）。これもその一種。〔袖咲〕25の詩に見える袖笑のこと。〔芸閣〕江芸閣のこと。〔眼穿〕穴があくほどじっと見つめる。すなわち、非常に待ち焦がれる意。〔鱗羽〕魚と雁。転じて手紙の意。〔沈沈〕気持ちが重苦しいさま。〔翠袖〕青緑色の袖。ここでは袖笑を指す。〔三十六湾〕「三十六」は数多い意。唐の許渾の「三十六湾」の詩に「三十六湾　秋月明らかなり」、長崎の詩人・吉村迂斎の「大村湾」の詩に「三十六湾　湾　湾に接す」とある。〔一寸〕心について僅かばかりであるとへりくだって用いる語。

27

眠驚船底響寒潮　眠より驚めて船底に寒潮響き、
天草洋中夜繫橈　天草洋中夜橈を繫ぐ。

太白一星光似月　太白の一星光月に似たり、
波間照見巨魚跳　波間に照らし見る巨魚の跳るを。

船底から聞こえてくる冷たい潮の音に安眠を破られ、天草の海に夜、櫂をつないで舟を泊める。／宵の明星の光はあたかも月光のようで、波間から大きな魚が躍り上がるのを照らし出している。

『詩鈔』巻四に「泊天草洋」と題して収める詩の初案。人口に膾炙する「泊天草洋」の詩は「雲耶山耶呉耶越、水天髣髴青一髪。万里泊舟天草洋、烟横篷窓日漸没。瞥見大魚波間跳、太白当船明似月」と、全体を大きく改めている。『詩集』巻十二には「泊天草洋」の題でいずれの詩も収める。『全伝』文政元年九月一日に「早天、天草島に寄泊。佐敷に入る。『天草洋』の短古は、その初稿、『眠驚船底響二寒潮一。天草洋中夜繫レ橈。太白一星光似レ月。波間照見巨魚跳。』の七絶であったが、長崎にて吉村迂斎の『大村湾』の作、『三十六湾湾又（一作レ接）湾。蜻蜓西尽白雲間。洪濤万里豈（一作レ非）無レ国。一髪青分呉越山。』を愛吟して、後に『雲耶山耶』の作を得たといふ。（第二句は、初め『水天之際見二一髪一。』、また『天際髣髴青一髪。』などに作る）」とあるが、八月二十三日長崎の茂木を出航後、天草灘を望んでの作と考えるのが通説。（天草洋）天草灘。（太白）いわゆる宵の明星。金星。

28

溫山遙面阿蘇山　温山遥かに阿蘇山に面し、
山脈逶迤碧玉彎　山脈逶迤として碧玉の彎。

瀦得海波開一鏡　海波を瀦し得て一鏡を開き、
相臨交照兩煙鬟　相い臨んで交ごも照らす両煙鬟。

雲仙岳は海を隔てて遥かに阿蘇山と相対し、青々とした山脈がうねうねと続いて弓なりに曲がっている。／海の波をためた水面が鏡のように開け、雲仙岳と阿蘇山がこの鏡のような海にその姿をかわるがわる映し出している。

『詩鈔』巻四、『詩集』巻十二に「舟中所見」と題して収める詩の初案。〔温山〕雲仙岳のこと。雲仙をもとは温泉と書いた。〔逶迤〕うねうねと続くさま。〔碧玉〕青緑色の美しい石。青く澄んだ自然の景物を喩える。〔彎〕『詩鈔』『詩集』は「環」に改める。〔瀦〕『詩鈔』『詩集』は「滙」に改める。〔一鏡〕くもりのない鏡のような水面。〔交〕『詩鈔』『詩集』は「自」に改める。〔両煙鬟〕雲仙岳と阿蘇山を指す。「煙鬟」は女性のびんの毛のことであるが、転じて、雲や霧につつまれた連峰の喩えに用いられる。

29

危礁亂立大濤間　危礁乱立す大濤の間、
官道沿緣海又山　官道の沿縁　海又た山。
鶻影低迷帆影滅　鶻影低迷として帆影滅し、
天連水處是臺灣　天　水に連なる処　是れ台湾。

大きな波の間から険しい岩礁が見えたり隠れたりし、海岸をめぐる公道の両側は海や山が迫っている。／はやぶさの飛ぶ影がぼんやりとして帆船の影が遠くかすみ、空と海が連なるあたりは台湾であろう。

『詩鈔』巻四、『詩集』巻十二に「阿嵎嶺」と題して収める詩の初案。「阿嵎嶺」は阿久根のこと。すなわち、現在の鹿児島県阿久根市。『全伝』文政元年九月に「阿久根〔阿嵎〕嶺を越ゆ」とある。〔危礁〕水面に見え隠れする危険な岩。〔官道〕公道。なおこの第二句、『詩鈔』『詩集』は「決眥西南不見山」に改める。〔鶻影〕はやぶさの飛ぶ姿。〔低迷〕ぼんやりして定かでないさま。〔帆影〕遠ざかってかすんだ帆船の形をいう。〔滅〕『詩鈔』『詩集』は「没」に改める。〔天連水処〕水平線の果ての、空と海が一続きになる所。なおこの詩の後半の二句は、宋の蘇軾の「澄邁駅の通潮閣二首」の詩の第二首に「杳杳として天は低く鶻の没する処、青山一髪是れ中原」とあるのが意識されているであろう。

30

一澗平分南北州　一澗平分す南北の州、
細沙幽草兩邊秋　細沙　幽草　両辺の秋。
曾無所屬唯溪水　曾て属する所無きは唯だ渓水、
幾股潺潺隨意流　幾股か潺潺として随意に流る。

一筋の谷川が南と北に公平に国を分け、いずれの地も細かい砂地にこんもりと草むらが茂り、ひとしく秋が訪れてい

る。／肥後・薩摩のどちらにもつかないのはひとりこの谷川だけであって、幾筋かさらさらと気ままに流れている。

『詩鈔』巻四、『詩集』巻十二に「過肥薩界」と題して収める詩の初案。『全伝』文政元年九月七日に「風雨を冒しつゝ、夜に入りて出水口〔薩摩境〕に著し……」とある。〔平分〕公平に分ける。〔南北州〕肥後と薩摩を指す。当時、肥後の細川氏と薩摩の島津氏が互いに力を競っていた。〔細沙〕『詩鈔』『詩集』は「乱沙」に改める。〔幽草〕こんもりと深く茂った草むら。『詩鈔』『詩集』は「深草」に改める。〔曾無〕全く～しない。〔潺潺〕水の流れるさま。『詩鈔』『詩集』は「潺湲」に改める。

31

路遇朝鮮俘獲孫　路に遇う朝鮮俘獲の孫、
窯陶爲活別成村　窯陶　活を為して別に村を成す。
可憐埴得扶桑土　憐れむ可し　埴として扶桑の土を得て、
造出當年高麗盆　造り出だす当年高麗の盆。

道の途中で遇った朝鮮国の捕虜の子孫たちは、陶器を焼いて生活の糧とし、日本人とは別に一つの村を作っている。／悲しいかな彼らは異国である日本の土を材料として、往年の高麗茶碗を作っている。

『詩鈔』巻四には「薩摩詞八首」の第二首、『詩集』巻十二には「薩摩詞十首」の第二首として収める。〔俘獲〕戦争において生け

捕りにした人。ここでは豊臣秀吉の朝鮮侵攻の際、島津氏が日本に連れて来た陶工たちを指す。〔窯陶〕「窯」は陶器を焼くかまど。「陶」は陶器を焼く意。ここでは二字で窯業の意に用いるであろう。〔為活〕生計を立てる。〔別成村〕朝鮮の陶工たちは薩摩に土地を与えられて窯をおこし、韓姓をそのまま名乗って代々居住した。〔埴得扶桑土〕日本の土を材料に用いて。「埴」は粘土のこと。〔当年〕往年の。〔高麗盆〕朝鮮半島で焼かれた茶の湯茶碗のこと。高麗茶碗。室町以後、我が国でも着目され、茶碗の主流として流行した。薩摩に渡った朝鮮の陶工たちが作った焼き物は、現在の薩摩焼のもととなった。「盆」は比較的底の浅く、平たい器。

10

錄自長碕至薩摩途上所得五首。

長碕自り薩摩に至る途上に得る所の五首を録す。

長崎から薩摩に至る道中で作った詩五首を書く。

〔録自長碕……〕以上の十三字は底本にのみ見える。「五首」は27～31の詩を指す。

32 麑洲旅舍歌　麑洲旅舍の歌

蛟蜃氣蒸萬家煙　蛟蜃　気は蒸す　万家の煙、
隔岸山影壓城邊　隔岸の山影　城辺を圧す。
京貨蠻琛列肆鬻　京貨　蛮琛　肆を列ねて粥ぎ、

賈舶中襍島夷船
吾來津樓卸行李
九月葛衣暑未已
燒筍醃豚旅飯腥
寄身側肩累跡裏
擧止便儇知攝商
語言輕脆認京妓
踧踖誰憐一儒生
食時爭席出爭履
萬里誰迫爲此行
逆境未當說不平
閑胠行囊披書讀
堆薪撑檐尺五明

賈舶　中に雑る島夷の船。
吾れ津楼に来りて行李を卸せば、
九月　葛衣　暑未だ已まず。
焼筍　醃豚　旅飯　腥く、
身を寄す側肩累跡の裏。
挙止便儇　摂商なるを知り、
語言軽脆　京妓なるを認む。
踧踖　誰か憐れまん一儒生、
食らう時に席を争い出ずるに履を争う。
万里　誰か迫りて此の行を為さしめん、
逆境　未だ当に不平を説くべからず。
閑に行嚢を胠き書を披いて読めば、
堆薪　檐を撑えて尺五明らかなり。

鹿児島の旅館にて

海の水蒸気が立ちこめ、家々の炊事の煙ともやがかかって、その向こうに対岸の山の輪郭がぐっと町に迫って見える。／このあたりでは都の品物や南方の珍品を売る店が連なり、港に停泊する商船の中には琉球からの船も混じっている。／船着き場にある旅館に旅の荷物をおろした私は、暑さがひかないので九月になっても葛衣を着ている。／焼

三

いたタケノコ、塩漬けの豚など、旅先の生臭い料理を日々口にしつつ、客で混みあう旅館に身を寄せている。／客のうち、動作のすばやいのは大阪の商人、歯切れのよい口調は京都の妓女。／食べる時には座席を奪い合い、出掛ける際には我先に履き物を履こうとする彼らの誰が、ひとりかしこまったこの町儒者などを気にかけたりしよう。／自ら好んで万里の果てまで旅してきたのであるから、このような居心地の悪さにも不平をこぼすべきではない。／手持ちぶさたに荷物をほどいて書物を出して読み出すと、うずたかく積まれた薪と軒の僅かな透き間から光が差し込んでくる。

『詩鈔』巻四、『詩集』巻十二に「麑州逆旅歌」と題して収める詩の初案。「麑洲」は鹿児島のこと。〔蛟蜃〕みずち。蛟竜。10の詩の注釈参照。〔気蒸〕水蒸気がすっぽり覆う。『唐詩選』に収める孟浩然の「洞庭に臨む」の詩に「気は蒸す雲夢の沢」とある。〔煙〕炊事の煙。『詩集』は「烟」に改める。〔隔岸〕対岸。『詩鈔』『詩集』は「対岸」に改める。〔山影〕遠くの山の輪郭。ここでは桜島の北岳・中岳・南岳を指す。『詩鈔』『詩集』は「岳影」に改める。〔城辺〕町のほとり。『詩鈔』『詩集』は「城闉」に改める。〔京貨〕都の品物の意か。〔蛮琛〕南方の珍宝。ここでは当時島津氏に隷属していた琉球を通して南方の諸外国から輸入した品々を指す。〔島夷〕島に住む異民族。ここでは琉球を指す。『詩鈔』『詩集』は「琉球」に改める。〔津楼〕渡し場にある旅館。〔葛衣〕葛布製の夏用の衣類。〔焼筍醃豚〕焼いたタケノコと塩漬けの豚。南方の料理の一種であろう。『詩鈔』『詩集』は「豚肉竹筍」に改める。〔側肩累跡〕肩を斜めにし、足のかかとが接する。すなわち人で混雑するさま。〔便僳〕すばやいさま。〔摂商〕摂州の商人。〔軽脆〕歯切れのよいさま。『詩鈔』『詩集』は「嬌軟」に改める。〔認京妓〕京都の妓女であるとわかる。袁枚の『随園詩話』巻五に引く清の楊守知の「西湖竹枝」の句「白舫青尊　妓を挾んで遊ぶ、語音軽脆　蘇州なるを認む」に拠るか。『詩鈔』『詩集』は「認」を「知」に改める。〔蹶踏〕かしこまっておどおどしているさま。〔誰〕『詩鈔』『詩集』は「自」に改める。〔一儒生〕山陽自身を指す。『詩鈔』『詩集』は「一書生」に改める。〔争席〕座席を奪いあう。うちとけて礼儀にこだわらない様子。『荘子』寓言篇

に「其の反るや、舎者（＝宿屋の客）之と席を争う」とあるのに拠る。〔万里誰迫為此行〕誰に迫られてこのような万里の果てまで旅をしてきたのか。誰に迫られたのでもない、自ら好んでやって来たのだ、という反語の句。〔当〕『詩鈔』『詩集』は「可」に改める。〔胠行囊〕旅行用の袋を開ける。『詩鈔』『詩集』は「啓行筐」に改める。〔撐檐〕軒を支えている。すなわち軒に届かんばかりの高さになっている。〔尺五〕一尺五寸。きわめて距離が近い喩え。ここでは高く積まれた薪と軒の透き間が非常に狭いことをいう。従って本を読もうにも僅かしか光線が差し込まない。

33 題画像七首　　画像に題す　七首

A 武侯　　武侯

有魚頼尾泣窮冬　　魚有り頼尾　窮冬に泣き、
涸轍無人憐喰喁　　涸轍　人の喰喁を憐れむ無し。
誰料南陽一勺水　　誰か料らん南陽一勺の水、
養渠忽地化爲龍　　渠を養えば忽地化して竜と為らんとは。

人物画に題する　七首

諸葛亮

疲れて尾を赤くした魚が冬に干からびた水溜まりで苦しそうにあえいでいるのを見ても、それを哀れむ人はいない。／誰が想像できるであろうか、この魚に南陽郡からひしゃく一杯の水を与えて養ってやったら、あっという間に竜に変わるということを。

〔題画像七首〕制作時期の異なる作品を集めて七首としたもの。『詩集』の編年を手掛かりとして考えれば、C・Eは西遊に先立つ文化七年（一八一〇）、D・F・Gは同じく文化十一年（一八一四）に作られた旧作を基にしたものに見えるが、韻律の整い方から判断する限り、むしろ「西遊詩巻」が初案で、『詩鈔』『詩集』所収の諸作はそれに手を加えた定稿であると思われる。またA・Bは西遊後の文政八年（一八二五）に連作として完成する「詠三国人物十二絶句」（『詩鈔』巻八、『詩集』巻十六）の一部で、そのうちこのAの詩は、『詩鈔』『詩集』では「十二絶句」の第二に「孔明」と題して収める詩の初案であろう。〔武侯〕三国時代の蜀の丞相諸葛亮のこと。死後、丞相武郷侯の印綬と忠武侯の諡を贈られたことからこう呼ばれた。〔魚〕劉備（10の詩参照）を指す。『三国志』蜀書・諸葛亮伝に見える劉備の言葉「孤の孔明（諸葛亮）有るは、猶お魚の水有るがごとき也」を踏まえる。〔赬尾〕疲れて赤くなった魚の尾。『詩経』周南の「汝墳」の詩に「魴魚赬尾」の句があり、「毛伝」に「魚労るれば則ち尾赤し」と注する。劉備が、荊州の劉表のもとに身を寄せたのち、戦から遠ざかって活躍の場を失い、意気消沈していたことを喩える。〔窮冬〕冬の末の月、陰暦十二月をいう。〔涸轍〕乾いてしまったわだちの水たまり。『荘子』外物篇の、わだちの水たまりから救いを求める鮒の話に基づき、困難な境遇をいう。〔喁喁〕魚が水面で口をあけて呼吸するさま。〔南陽一勺水〕諸葛亮を指す。劉備が訪ねた諸葛亮の庵が南陽郡鄧県の隆中（現在の湖北省襄樊市）にあった。なお『詩鈔』『詩集』は「一勺」を「半溝」に改める。〔養渠〕劉備がいわゆる「三顧の礼」によって諸葛亮を幕僚に迎え入れたことをいう。〔化為竜〕野にうずもれていた諸葛亮が劉備の参謀として力を発揮し、蜀漢の丞相の位に上ったことをいう。「竜」は才知の優れた人の喩えで、「諸葛亮伝」に見える徐庶の言葉「諸葛孔明は、臥竜也」を踏まえる。

B 壯繆　　壯繆

北伐長驅不備吳　　北伐長駆して呉に備えず、

髯公終被阿蒙愚　　髯公終に阿蒙に愚かにせ被る。

聞君曾讀春秋日　聞く君曾て春秋を読む日、
亦記秦軍敗殽無　亦た秦軍　殽に敗るるを記すや無や。

関羽

北上して遠く魏の樊城を攻めた時、呉に対して油断し、あなたはついに呂蒙にしてやられた。／あなたに質問しよう、昔、『春秋左氏伝』を読んだ時に、秦の軍隊が遠方の鄭を攻めために殽の地で敗れたことを覚えていたかどうかを。

『詩鈔』巻八、『詩集』巻十六に「詠三国人物十二絶句」の第三首として「関羽」と題して収める詩の初案。〔壮繆〕三国時代の蜀の武将関羽のこと。死後、壮繆侯の諡を贈られた。〔北伐長駆不備呉〕二一九年、劉備によって漢中の前将軍に任命された関羽が、荊州から北上して魏の樊城を攻めた時、呉の呂蒙の計略にはまり、守備に残しておいた兵をも前線に回してしまったため、呉に背後から攻略されたことを指す。〔髯公〕関羽のこと。関羽は立派なひげを蓄えていたので諸葛亮から「髯」（＝ひげ）と呼ばれていたと『三国志』蜀書・関羽伝にある。〔阿蒙〕呂蒙のこと。始め一介の武人にすぎなかった呂蒙が、努力して儒者を凌ぐ学問を積んだのに驚いた魯粛の言葉「復た呉下の阿蒙に非ず」（『三国志』呉書・呂蒙伝の注に見える）に拠る。〔愚〕騙す。〔聞〕質問する。『詩鈔』『詩集』は「問」に改める。〔君曾読春秋日〕関羽が『春秋左氏伝』を好み、その内容をほぼそらんじていたことが「関羽伝」の注に見える。〔亦〕『詩鈔』『詩集』は「卻」に改める。〔秦軍敗殽〕前六二七年、秦の軍隊が遠方にある鄭を攻略しようとして、殽の地で晋に敗れたことが『春秋左氏伝』僖公三十三年に見える。『詩鈔』『詩集』は「秦人殽役」に改める。

C 青蓮

盧嶽雲松未可攀
桃花何處聞仙寰
長安市上一杯裏
別有天地非人間

青蓮

盧岳の雲松未だ攀ず可からず、
桃花何れの処にか仙寰を聞く。
長安市上一杯の裏、
別に天地の人間に非ざる有り。

李白

盧山の雲を凌ぐ松の木にもまだ登ることができず、どこに桃の花びらを流水に浮かべた仙境があるのか見当もつかない。／そして相変わらず長安市中の酒場で一杯また一杯と酒を飲んでいるのだが、そこにも俗界とは異なる別世界はあるのだ。

『詩鈔』巻一、『詩集』巻六に「題李白酔図」と題して収める詩の初案。〔青蓮〕唐の詩人李白のこと。「湖州の迦葉司馬の白は是れ何人ぞと問いしに答う」の詩に「青蓮居士　謫仙人、酒肆に名を蔵すること三十春」とあるように、彼は自ら青蓮居士と号した。〔盧岳〕江西省九江市の南にある盧山のこと。〔雲松〕李白の「盧山の五老峰を望む」の詩に「吾れ将に此の地にて雲松に巣くわんとす」とあるのを踏まえる。〔桃花〕六朝・東晋の陶淵明が理想の仙境を描いた「桃花源の記」を連想させる語であるが、直接には李白の「山中問答」の詩に「桃花流水窅然として去る、別に天地の人間に非ざる有り」とあるのを踏まえる。〔聞〕『詩鈔』『詩集』は「問」に改める。〔仙寰〕仙境。以上の二句は、安禄山の乱の時、永王の軍に加わって敗れ、罪を得たために、理想とする自由気ままな生活ができなかったことをいう。〔長安市上一杯裏〕『唐詩選』に収める杜甫の「飲中八仙歌」の詩に「李白は一斗　詩百篇、長安市上　酒家に眠る」とあるのに拠る。〔別有天地非人間〕「山中問答」の詩の第四句を用いる。

D 武忠

令公孫子似螽斯　　武忠
何獨膝前羣綵嬉　　令公の孫子　螽斯に似たり、
曾逐虎狼全海宇　　何ぞ独り膝前に群綵嬉ぶるのみならんや。
蒼生誰不郭爺兒　　曾て虎狼を逐って海宇を全うす、
　　蒼生誰か郭爺の児ならざらん。

郭子儀

中書令どのの子孫はいなごのように数が多いが、子や孫たちが色鮮やかな衣服で着飾って、彼の膝元で戯れているだけにとどまらない。／かつて安史の乱では悪党を追い散らして西安・洛陽を奪回し、唐の天下を保ったのだから、人民の中で郭翁の子孫でないものはいないだろう。

『詩鈔』巻二、『詩集』巻九に「郭汾陽聚児孫図」と題して収める詩の初案。〔武忠〕「忠武」の誤り。忠武は唐の武将郭子儀の諡。〔令公〕中書令に対する尊称。ここでは中書令を務めた郭子儀を指す。〔螽斯〕いなご。一説にきりぎりす。『詩経』周南の「螽斯」の詩を踏まえ、ここでは子孫が多い喩え。郭子儀は数十人も孫がいたため、孫たちが安否を問いに来ても区別がつかず、ただ頷くだけであったと両『唐書』の郭子儀伝にある。〔群綵嬉〕子や孫が彩り鮮やかな衣服を着て戯れ遊んでいる意。春秋時代、楚の老萊子が七十歳になっても幼な子のようにふるまい、色鮮やかな服を着て親を喜ばせた故事（『初学記』巻十七に引く「孝子伝」、『芸文類聚』巻二十に引く「列女伝」などに見える）に拠る。〔虎狼〕凶悪残忍な人の喩え。ここでは安史の乱の首謀者である安禄山・史思明を指す。〔全海宇〕郭子儀が、回紇・西域諸国の援軍を得て、安史の乱で失った西安と洛陽を至徳二年（七五七）に奪回したことを指す。〔蒼生〕人民。『詩鈔』『詩集』は「生霊」に改める。〔郭爺〕郭子儀を指す。「爺」は年長の男性に対する尊称。『詩鈔』

『詩集』は「郭家」に改める。

E 和靖

澶淵胡馬簇塵埃　澶淵の胡馬　塵埃簇がるも、
一點不來湖水隈　一点も来らず湖水の隈。
湖上落楳花滿地　湖上　落楳　花　地に満ち、
也勝蠟淚積成堆　也た勝る蠟涙の積んで堆を成すに。

林逋

澶州では遼の大軍が土けむりをあげて攻め込んできたが、ここ西湖のほとりには塵ひとつ飛んでこない。／地面いっぱいに梅の花びらが散り落ちているこの静かな湖畔の毎日は、夜通しの宴会のあげく蠟燭のしずくが地に山をなすようなお役人の生活よりずっとすばらしい。

『詩鈔』巻一、『詩集』巻六に「林逋図」と題して収める詩の初案。〔和靖〕宋の詩人林逋のこと。死後、仁宗から和靖先生の諡を賜った。〔澶淵〕澶州（現在の河南省の清豊県・濮陽県・范県にまたがる地）の別称。景徳元年（一〇〇四）、遼の大軍がここへ攻めて来た時、宰相寇準が真宗を説得して親征させ、「澶淵の盟」と呼ばれる和議が成立した。〔胡馬〕北方・西域の異民族の軍隊。ここでは遼の軍隊を指す。『詩鈔』『詩集』は「万馬」に改める。〔簇〕多く集まる。『詩鈔』『詩集』は「鬧」に改める。〔一点〕非常に少ない数量をいう。〔湖水隈〕湖のほとりの湾曲した所。林逋が隠棲していた杭州西湖の湖畔の地・孤山を指す。なおこの第二句、『詩鈔』『詩集』は「埃点何曾到我梅」に改める。〔楳〕「梅」の異体字。林逋は梅の花を愛した詩人として知られる。この第三

句、『詩鈔』『詩集』は「愛個落梅香満地」に改める。〔也勝蠟涙積成堆〕「蠟涙」は蠟燭をともした時に垂れる蠟のしずく。寇準は若い頃から富貴で、鄧州の知事の時代には宴会を好み、夜通し蠟燭をともしていたので、便所の中にまで蠟のしずくが垂れて地に山をなしていたと宋の欧陽修の『帰田録』巻一にある。当時の照明として、蠟燭は油を燃料とするランプなどよりも贅沢品であった。この句は、そうした高級官僚・寇準の贅沢な生活よりも、湖畔の梅に囲まれた、林逋の清らかな日々の方がまさる意。なお『詩鈔』『詩集』は「蠟」を「燭」に改める。

F 文忠　　文忠

幾帙殘編掃白魚　　幾帙の残編　白魚を掃い、

還衝泥濘過村墟　　還た泥濘を衝いて村墟を過ぐ。

憶廡蓮燭送歸院　　憶うや廡や蓮燭　送られて院に帰り、

坐讀玉堂森寶書　　坐して読む玉堂に宝書森たるを。

蘇軾

やっと見つけた何帙かの残巻を紙魚を払い落としながら読むために、ぬかるみにもかまわず笠と履き物を借りてまた今日も村里の道を通っている。／覚えているであろうか、かつては翰林学士院に帰るのにも金蓮燭によって送られ、数多くの珍しい書物を何の苦労もなく読むことができたのを。

『詩鈔』巻二に「東坡笠屐図」、『詩集』巻九に「東坡笠屐」と題して収める。宋の詩人蘇軾が晩年、海南島の儋州に流された時の生活ぶりを描いた「東坡笠屐図」を見て作った詩。当時、書物に窮していた蘇軾は、黎子の家に柳宗元の文集数冊を見つけ、そこ

に行っては一日中読み耽っていた。ある日雨に遇って笠と履き物を借りて帰ったが、その様子をある人が絵にかいたと『貴耳集』巻上に見える。〔文忠〕蘇軾の諡。〔帙〕線装の書物を数える助数詞。〔残編〕欠けた巻のある不完全な書物。ここでは蘇軾が黎子の家で見た柳宗元の文集を指す。〔泥濘〕泥が水を含んでどろどろになっていること。〔麼〕疑問を表す助字。〔蓮燭送帰院〕蘇軾が翰林学士の時、宮中での宿直から帰るのに、帝の居室の金蓮燭（ハスの花の形をした黄金製の照明）によって送られたことが『宋史』蘇軾伝などに見える。臣下としての最高の栄誉に浴していたことをいう。〔玉堂〕翰林学士院のこと。〔森〕数の多いさま。〔宝書〕貴重な書物。なおこの第四句は、黄庭堅の「双井の茶　子瞻に送る」の詩に「天上の玉堂　宝書森たり」とあるのを踏まえる。

G 武穆

痛飲黄龍志已空
兩河百郡虜塵重
西湖贏得墳三尺
留與遊人認宋封

武穆

痛飲（つういん）黄竜（こうりゅう）志（こころざし）已（すで）に空（むな）しく、
両河（りょうが）百郡（ひやくぐん）虜塵重（りよじんかさ）なる。
西湖（せいこ）贏（か）ち得（え）たり墳三尺（はかさんじやく）、
遊人（ゆうじん）に留与（りゆうよ）して宋封（そうほう）を認（みと）めしむ。

岳飛

黄竜府に行って痛飲しようと意気軒昂であったのも今やむなしく、河北・河東にまたがる百郡はその後、金や元の軍に侵略されるに至った。／しかし西湖のほとりには今でも岳飛の墓が残って、旅人にここが宋の領土であったことを知らせている。

『詩鈔』巻二、『詩集』巻九に「岳飛」と題して収める詩の初案。〔武穆〕岳飛の諡。〔痛飲黄竜〕各地で金軍を破り、得意の絶頂に

あった岳飛が部下の武将たちに対して華北回復の決意を述べた言葉「直ちに黄竜府に抵り、諸君と痛飲せん」（『宋史』岳飛伝）に基づく。黄竜府は現在の吉林省農安県。『詩鈔』『詩集』は「唾手燕雲」に改める。〔両河百郡〕「両河」は当時の河北・河東の一帯、すなわち現在の河北・山西の両省にまたがる黄河以北の一帯を指す。岳飛が金との和議に反対した上書の中に「地を両河に収めんことを期す」の語があったといい（『御批続資治通鑑綱目』巻十四・紹興九年）、また南宋の陸游の「感憤」の詩にも「両河 百郡 宋の山川」とある。〔虜塵〕敵軍の侵略。〔西湖〕浙江省杭州市にある湖。このほとりに岳飛の墓と彼を祭った岳王廟がある。〔贏得〕手に入れる。勝ちとる。〔留与遊人認宋封〕『三体詩』に収める唐の鄭谷の「曲江の春草」の詩に「遊人に留与して一たび酔眠せしめよ」とあるのと同類の表現。旅人のために岳飛の墓を残して、そこが宋の領土であったことを認めさせるということ。

34 七星春歌

重碧瀲灩漲長餅
何縁命名喚七星
腕擎琥珀光迸掌
訝佗寒芒照畫檽
吾戸雖小嫌甜酒
常恨泉醸不可口
宴酣煩君更往賒
始慰萬愁付一帚
君不見吾胸未能羅二十八宿

七星春の歌

重碧瀲灩として長餅に漲る、
何に縁ってか命名して七星と喚ぶ。
腕 琥珀を擎ぐれば光 掌に迸り、
訝る佗の寒芒 画檽を照らすを。
吾が戸小なりと雖も甜酒を嫌い、
常に恨む泉醸 口に可からざるを。
宴酣にして君を煩わし更に往きて賒らしめ、
始めて慰ゆ万愁 一帚に付するを。
君見ずや吾が胸未だ二十八宿を羅ぬる能わざるも、

猶能向腹藏北斗　　猶お能く腹に向って北斗を蔵するを。

七星春の歌

細長いかめに満々とみなぎっている、この深緑色をした酒は、どのようなわけで「七星春」と命名されたのだろう。／腕で高く持ち上げると琥珀色の光が手のひらにほとばしって、まるで北斗七星の冷たい光が、装飾をこらしたれんじを照らすかのようだ。／自分は酒の飲める質ではないが甘い酒は真っ平であって、いつも泉州の酒が口に合わないのを恨めしく思ってきた。／宴たけなわになってあなたに更に伊丹の酒を買ってきてもらい、そこでやっと胸中のさまざまの悩みが晴れてゆく気がした次第である。／さあごらん、この私は洛陽の才子たちのように胸に二十八宿をならべることはできないが、この通り腹に北斗七星を入れることができる。

『詩鈔』巻三、『詩集』巻十一に収める同名の詩の初案。〔七星春〕「七星」は、北斗七星。「七星春」とは、『詩鈔』『詩集』に見える自注に「伊丹の酒の名なり。碕港（＝長碕港）の致す所は皆泉醸（＝泉州の酒）にして、伊丹は独り此の一品有るのみ。或るひと余を招いて此れを供す。賦して謝す」とあるように伊丹の酒の名で、江戸時代ではここで醸造される清酒が最上とされた。なお、李白の「宣城の喜醸紀叟を哭す」の詩に「老春」という酒が見えるように、唐代の中国人は酒の名によく春の字を用いた。「七星春」も恐らくはそれに倣ったのであろう。〔重碧〕深緑色。杜甫の「戎州の楊使君が東楼に宴す」の詩に「重碧　春酒を拈る」とあるように酒の色をいう。〔瀲灩〕水の満ちるさま。〔長缾〕長い形のかめ。酒を入れておく容器。〔擎〕高く持ち上げる。〔琥珀〕古代の樹脂の化石で、淡黄色、褐色、赤褐色などのもの。ここではそのような鮮やかな色をした美酒の意。『唐詩選』に収める李白の「客中行」の詩に「蘭陵の美酒　鬱金香、玉椀盛り来る琥珀の光」とある。〔画檽〕「檽」は窓や欄干の上に取り付けた格子。その美しく飾りつけたものが「画檽」であろう。〔吾戸雖小嫌甜酒〕「戸」は酒量。白居易の「久しく韓侍郎を見ず、戯れに四韻を題し

以って之に寄す」の詩に「戸大にして甜酒を嫌う」とある。〔不可口〕口に合わない。〔賒〕掛けで買う。すなわち「或るひと」に伊丹の酒を買ってこさせる。〔貶〕「覚」の古い字体。『詩鈔』『詩集』は「覚」に改める。〔万愁〕「百愁」「千愁」などと同じく多くの愁いの意であろう。〔付一帚〕一本のほうきにまかせる。蘇軾の「洞庭春色」の詩に、酒のことを「掃愁帚」（愁いを掃う帚）と称するとある。すなわち「一帚」とは伊丹の酒を指し、それによって胸中の愁いをとり払うのである。〔君不見〕15の詩の注参照。〔胸〕『詩集』は「腕」に作る。〔二十八宿〕古代中国で天体の位置を示す基準とした二十八の星座。『古文真宝』に収める李賀の「高軒過」の詩に、洛陽の才子・文豪の胸中には二十八宿が並んでいるとある。〔猶能向腹〕『詩鈔』『詩集』は「我腹猶堪」に改める。〔北斗〕北斗七星の連想から、伊丹の酒「七星春」を指す。

文政紀元、歳次戊寅、秋九月。雑録途次所得拙詩。似南薩河南雅契。咲正。頼襄。

文政紀元、歳、戊寅に次る、秋九月。途次に得る所の拙詩を雑録す。南薩の河南雅契に似す。咲正。頼襄。

文政元年、戊寅の年の秋九月。道中に出来上がった拙い詩をいろいろと取り混ぜて墨書しておく。薩摩の河南殿にご覧に入れ、ご批正を乞う。頼襄。

以上の三十字は『全伝』文政元年九月にも引かれるが、『詩鈔』『詩集』には見えない。『頼山陽文集』巻八に収める「自書西遊詩巻後」は字句がやや異なる。〔河南雅契〕河南源兵衛のこと。「雅契」は相手を敬愛していう称。『全伝』文政元年九月に「野菜町の支店〔本店は阿久根〕に来合せた河南源兵衛に招かれ『西遊詩巻』を揮毫す」とある。但し、『文集』所収の「自書西遊詩巻後」は「〔鮫島〕白鶴雅契」に作る。〔頼襄〕「自書西遊詩巻後」には「頼」の字無し。

〔付記〕(1) このたび本訳注を作成したのは、書家・森士郷氏より「西遊詩巻」の存在をお教えいただき、その内容についてご質問を受けたことが大きな動機である。記して深く感謝申し上げる。

(2) 「西遊詩巻」に付せられた重野成斎・頼支峰の二つの跋では詩の総数を五十二首に数えているが、本訳注では18の詩（「発赤関留別諸友」）を『詩集』に従って二首に分けたため、全体で五十三首となった。